

相互性としてのケア
—かかわりが育む家族、教育、医療のナラティブ—

Care as the Mutuality:

Narrative on the Family, Education, and Medicine in the Relationship

研究代表者 竹家 一美 (D3) 教員 やまだ ようこ
研究分担者 竹内 みちる (D3) 鮫島 輝美 (D2) 西山 直子 (D1)
竹内 一真 (M2)

〔研究目的〕

近年わが国では、ケア役割やケアの質の重要性が、改めて問い直されるようになってきた。長寿社会の到来による要介護高齢者の増加や、大規模な自然災害、事故や犯罪等の多発、そして深刻な不況による失業者の急増など、ケアを必要とする人々の増加を背景に、ケアは医療・福祉の場のみならず、個々人の生活の場においても必要とされる状況となった。「ケア」については、従来、よりよいケアの実現を目的としてケアを受ける人々、すなわち高齢者や子ども、障害者や患者、被災者などを対象とした研究が行われ、有用な知見が蓄積されてきた。しかし「ケア」という営みが、より本質的な意味において我々の「生活／人生(life)」に不可欠なものと考えれば、それだけでは不十分である。より日常的な家庭、職場、教育や文化等の場で営まれる「ケア」について、ケアされる側のみならずケアする側にも焦点をあてながら、ケアを軸とした人間の生涯発達や、ケアの意味というものを、多次元的に検討していくことが必要である。

そこで本コロキウムでは、この「ケア」の営みを多次元的に検討し、人生における「ケア」の意味について理解を深めることを第1の目的とした。これは、ケアを「人と人のかかわりによって生成される人間の本質的な力」と広義に捉え、ケアが生まれる精神性とケア実践による変化・発達の諸相を、ケアする側に焦点化しつつ、ケアする人とケアされる人のかかわりの中でみようとすする試みである。その際、我々は Erikson(1950)の「相互性(mutuality)」概念、すなわち「する人／される人」といった単純な二項対立的ではない、一見して明白な上下関係の内に、実は双方の心を内的に活性化させる力が潜んでいる関係性を視座とした。この見方によれば、双方はそのかかわりの質において同等であり、「ケアすると同時にケアされる」という図式が成り立つ。ところで、こう

した関係性の観点は、教育や発達領域だけでなく、最近では、医療の場においても注目されている。それが、医療・医学を「語り、物語」という観点から全面的に見直そうとする「ナラティブ・ベイスト・メディスン(NBM)」である。NBMでは、医者と患者は専門家-素人という役割に縛られることなく、専門家が患者から教わることで協働する関係性が発展する。その意味で、NBMは、相互性を視座とする本コロキアムの研究に極めて親和性が高く、NBMの習得・理解は我々にとって価値あることと思われる。よって、本コロキアムでは、ケアの営みの多次的検討に向けてNBMの実践を理解し、相互性の観点から医療におけるナラティブの意義を考察することを第2の目的とした。

【研究経過】

上述の研究目的に鑑み、本コロキアムメンバーは、文献読書会と共同研究会、およびフィールド調査を並行的に継続する一方で、スポット的にNBM関連のWS、および国内外の学会における参加・発表を行った。文献読書会、共同研究会においては、堀家健一（教育学研究科M1）が参加したことで新たな視点が加わり、「相互性としてのケア」をめぐる議論が一段と深まった。また、背景を異にするメンバー（竹家・西山：生涯発達心理学、竹内みちる・鮫島：社会心理学、竹内一真：教育心理学）個々のフィールド調査の報告・検討は、互いを刺激し、ケア実践の多次的理解に大いに寄与した。さらに、竹家・西山・竹内一真は、NBM発祥の地であるロンドンに赴き(7月)、専門家から直接指導を受けると共に、自らの研究発表を通して、改めて「相互性としてのケア」の意義を確認した。これら3名のNBMに関する知見は、メンバー間で共有され、後期の活動推進に建設的な効果をもたらした。尚、本コロキアムの成果の一部は、2010年3月の発達心理学会自主ラウンドテーブルで発表されることになっており、さらなる議論の展開が期待される。

【研究成果】

本コロキアムの主な成果は以下の通りである。

1. Eriksonの発達観のレビュー・議論を通して、個々のフィールドにおけるケア実践の理解、特にケアする側の人生における「ケア」の意味に関する理解を深めたこと
2. NBMについて学び、その考え方や実践を知ることによって、改めて「ケア」の営みを、ケアする人とケアされる人のかかわりの中でみることの重要性を実感したこと
3. 個別のフィールド調査を報告し合い討論することで、新たな発見や洞察を得、各々の問題点が明らかになり、研究目的が先鋭化したこと

我々は、相互性の観点から、「ケア」が人の発達・成長を促す力になり得ることを理解する一方で、「ケア」がそうした肯定面に収束しきれない複雑な多面性を孕むこともまた、フィールド調査を通してみてきた。今後は、そのような現実的側面にも焦点をあて、正負両面から「ケア」の営みを、より多次的に捉えていきたいと考えている。